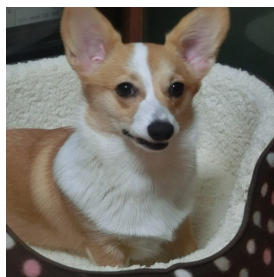
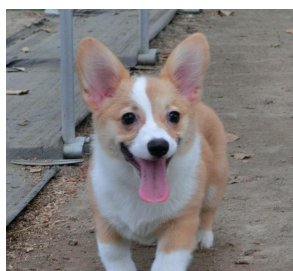


コラム45:犬の気持ち (2015.8. 4)

イヌといっしょに生活して一年が過ぎました。私の膝の上で丸くなっているコイツの暖かく柔らかい腹を、撫でてみると、不思議に心が休まりますね。「コラム33:ワンちゃんとの出会い」で、コイツとの「なれそめ」から、いろいろな問題について書きました。今では生後一年と五か月ということで、体重は4.6キロから6.9キロになり、もう立派な成犬です。「コーギー」という犬種の体重は10キロから12キロ位が普通のようなので、うちの「ベリーちゃん」は随分と小柄ということになりますね。それでもカワイイ子犬から、すっかり大人のイヌの顔に成長しましたよ。しかし、人間と他の動物との共生というのは、いろいろと大変です。今までの自分たちの生活を変えなくてはいけないことも一杯でてくるのですよ。それでも後悔をしないのは、それ以上に＜彼女＞が側にいることで、私たちが幸せになっているからでしょうね。

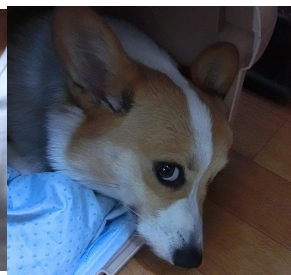
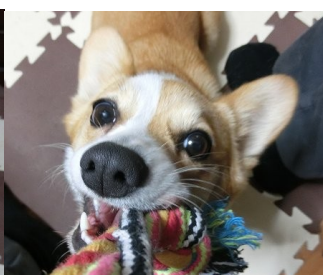
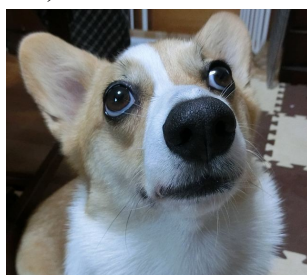


＜ベリーちゃんは外面(そとづら)がイイ！＞

前回にも書きましたが、この犬種は牧羊犬でから、牧場を牛を追いかけて走り廻っているのが、一番自然な姿なのです。言い換えれば、それがコイツが一番幸福な状態とも言えますね。当然ながら、気性は激しく身体能力は高いのです。しかし、本来の性質と生活のままでは、私たち人間と生活を共にすることはできません。そこで必要になってくるのが「躰レッスン」というわけです。妻とともに二人で協力して世話をしていますが、「ムスメの教育方針」では対立していますね。妻が躰教室に週一連れて行って「いい子」に育てようという「しつけ派」、私の方は本来の性質を尊重する「放任派」という感じですかね。

レッスンでの＜彼女＞の評判は、もの覚えがよく、トレーナーさんの言うことを良く聞く「優等生」。散歩中に通りがかりの人に「かわいいね」と言われると、必ず側に行き、前足を挙げてピョンピョン飛びつく「いい子」。「知らん人に、そこまで愛想を振りまくことないだろうが！」と思うのですがね。ホンマにコイツは外面のいい「ぶりっ子」なんです。そして家の中では本性丸出し。鬼のような形相に変貌して、飛びつき、噛みつき、吠えまくって、大暴れ！この落差、困ったモンです。(笑い)

そうは言っても、この本性の方がコーギーという犬種の特徴、引き継いで来たDNAというヤツですから、仕方のないことだと思っています。吠えると言っても、夜中にズーと吠え続けるわけではないし、噛むと言っても、血が出るほど噛むわけではないですからね。イヌは不満があっても言葉が話せないので、他に気持ちを表現する手段を持たないのですから、少しは我慢してやるしかないですね。もう一つこの犬種の特徴なのかもしれませんが、実に表情豊か、七変化という感じで感情がモロに顔に出てくるのですよ。それもまた魅力なんです。この「親バカ」ぶりも困ったモンですが……



<コイツの気配りはスゴイ！>

イヌはヒトに序列をつけるといいますね。家族の中でも順位をつけているといわれます。細君がさも自信あり気に、私に挑戦します。「二人で同時に呼んで、どちらに来るかやってみる？」私も一応は一家の主、受けて立つことにします。なんせ一緒にいる時間は圧倒的に私の方が長いのですから。私たちは二人並んで、ベリーちゃんの正面から声掛け。はたして結果は？ベリーちゃんは何の躊躇もなく、妻の方へスタスタと……完敗でした。コイツはどちらを優先する方が、自分の将来にとって賢明かを、瞬時に判断したのです。経済力、指導力そして性格。そりゃ私より妻を怒らせる方が怖いに決まっています。賢明な選択ですよ！（拍手）

コイツのスゴイ所はそれからのアフタケアです。妻の腕に抱かれた後、すぐに私の所に来て膝の上にあがってきます。そして私の顔をペロペロと舐めて「我慢してね」と囁いて(?)、今度は私に体を預けたまま、隣に座っている妻の手を鼻でツンツン「本命はそっちだよ」と一言(?)。ここまでの気配りを、コイツは瞬時にやってのけたのです。これは「クラブのママ」に匹敵します。お馴染みの常連客と話をしつつ、右の連れの客の手を握り、左手は初めての客の膝の上。実に巧みな気配りです。ウチのベリーちゃんは「銀座のママ」になれますね。

<コイツは言葉がわかる！>

呼びかけたわけでもないのに、家の者同士の何気ない会話に、いきなり反応することがよくあります。たとえば「そろそろ帰ろうか」とか「ハウスに入れようか」といった言葉に敏感に反応してくるのです。イヌは200語位の言葉を覚える能力があるようですが、かなりの個体差はあるようです。私はこのイヌの言語理解はかなりのレベルになると信じ、努めて話しかけるようにしています。知らない人が聞くと、ブツブツと独り言を言っている「変なオジサン」と思われているかもしれませんね。



たとえば、餌を何度も欲しがってしつこく吠える時などに、怒ったり叩いたりすることはしません。私は這いつくばって、まずはイヌと同じ目線にして、「説教」を始めるのですよ。「ベリーちゃん、もう一杯上げたでしょ」。それから箱の中にある、残している食物を前に並べてゆくの。「これも食べてないし」「これも食べてないよね」うなだれてジッと聞いています。そこで強い口調でトドメの一言。「ベリちゃん、ダメじゃん！」<彼女>はスグスグとテーブルの陰に行き、ベタッと伏せて頭を前足の間にウズめて「反省のポーズ」になるのです。かわいいヤツですよ。

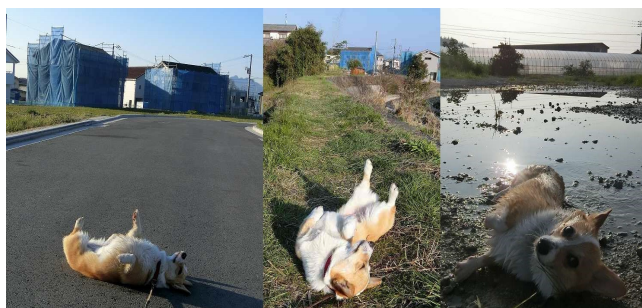
<入った時は喜んで、出ていく時は猛犬？>

今のコイツの一番の問題は、出て行く時に怒ること。つまり、人が来ることはうれしいらしく、飛び跳ねて喜んでくれるのです。ところが、帰ろうとして席を立つと、トタンに顔色を変えて吠えだし、出口へ走ってスゴイ形相で吠えるのですよ。「逃がさへんで！」その感じですね。そこで無理やり出ようとすると、吠える、噛む、飛びつく、の三重奏。そりゃもう、ヒドイもんですよ。

およそ一年前、兵庫県明石市のペットショップ、小さな檻に住む「大きな耳の子犬ちゃん」。それが「ベリーちゃん」でした。5月の連休明け頃からいたようですから、生後2か月くらいで親から離されたのでしょう。小屋の中ではおとなしくて寂しそう、さながら「マッチ売りの少女」です。それなのに、外に出すとトタンに愛想を振りまいてペロペロと舐めてきます。「コイツはこんなことを、どれだけ繰り返してきたんじゃろうか」そう思うと切なくなります。帰る時になると「猛犬に変身」という悪癖は、子犬の時代のそんな「残酷な体験」が原因ではないのか。他のイヌ達は忘れてしまうことでも、コイツはそれが大きなトラウマになって、記憶から消し去ること



ができないのでしょう。「見捨てられる！」という恐怖を感じて、激しい行動をするのではないかな。そんなことを私は勝手に推測するのですが……



<ベリーちゃんはミズが好き？>

ウチにやってきた子犬の頃から、コイツの気になる行動がありました。散歩中に、いきなり立ち止まり、動かなくなるのです。それも大抵は道の真ん中ですよ。それから、さらにそこにゴロリと仰向けになり、体を地面にコスリツケルように、右に左に転がるのです。最初は「ベリーちゃん！危ないでしょ！みつともないからやめなさい！」と言っていたのですが、そのう

ちホッテおくようになりましたね。あまりに頻繁だからです。成犬になった今でも、散歩に行くと、一度はやりますね。何をやってもカワイイのだから困ったモンです。

イヌをテーマにしたTVのバラエティー番組で、このような犬の不可思議な行為の原因は「ミズ」であるといっていました。そう、あの土の中にあるミズですよ。「ネコにマタタビ」はよく知られていますが、イヌにとってのミズは、そんなモノらしいですね。麻薬のようなもので、匂いに引き付けられて、気持ちが良くなるのでしょうか。それにしても、今まで飼っていたイヌたちはそんなことはありませんでした。ウチのベリーちゃんは特別にミズに敏感なのでしょうかねえ。(???)

<ネコとはお友達なの？>

ウチのベリーちゃんの場合は、ネコが好きというより、全く無関心なのです。ネコが側に来ても、吠えたり追ったりしないし、ほとんど見てもいないのです。子犬の頃のことですが、散歩中にネコの親子に遭遇したことがあります。子猫を守るために親猫は完全な戦闘態勢。体を弓のように丸めて「フー」と唸り、今にも飛びかからんばかりです。ところがコイツは、その親猫のすぐ側を、何事もなかったかのごとくスタスタと通りすぎたのです。無視された親猫は、キョトンとして固まっていたね。「このイヌなんで(!?)」と思ってるようで、何ともおかしい光景でした。

近くのイチゴ農家のFさんの所に、イヌの散歩の途中によく立ち寄ります。そこには大きなネコがいるんですよ。体格的にはほぼ互角というところでしょうか。最初は他のネコの反応と同じく、激しく威嚇していました。しかし、ウチのベリーちゃんは例によって全く無視です。そのうちにネコちゃんの方も怒らなくなるのですが、なぜか関心はあるらしく必ず出てくるのです。最近ではベリーちゃんの近くに来て鼻を近づけてきます。ウチのワンちゃんも仕方なく(?)鼻を伸ばして、お互いに鼻でツンツン。イヌとネコの奇妙な友情関係が成立したようですね。



<イヌ派とネコ派？>

ウチのカミサンは大のネコ嫌い。ウチの庭にネコがいるのを見つけると、トタンに履いていたサンダルを脱ぎ、投げつけるのです。「殺したるー！」そんなに悪いことをするわけじゃなし、怒ることないと思うのですがね。「ウチに入ってくるだけでも許せんのんよ」と息巻いています。誰にも止める

ことはできません。困ったもんです。おそらく彼女自身が「ネコの性格」の「イヌ好き人間」で、ネコにそっくりだからでしょうね。ワガママで気まぐれで……これ以上はとても書けませんかね。

そこへいくと、私の方は「イヌ的性格」の「ネコ好き人間」ですから、決して追い払ったりしません。私のウチを散歩コースか遊戯場としているネコ達も、よくそれを心得ています。私が側を通ってもソシヌ顔。全く逃げませんね。私はネコたちが自由に木陰で休んだり、戯れている光景が好きなんです。歩く姿もトラみたいで優雅じゃあないですか。昨年、ネコ達はハウスの屋根に上がってビニールに穴を開ける、という「悪行」をしました。それで今年は周囲にネコ対策の防護ネットを張りましたので、今のところ私とのトラブルは発生していませんね。

< 文人は圧倒的にネコ派？ >

イヌが好きか、ネコが好きか、という論議は昔からなされているのですが、そう簡単に決着のつくような問題ではないでしょうね。私のように両方好きというのは例外で、大抵はどちらかになるようです。作家と言われる人たちは、どうも「ネコ好き派」が多いようです。古い所では、「吾輩は猫である」の文豪 夏目漱石、新しい所では、多くの名作ドラマを残した向田邦子さんなども大変なネコ好きであったようです。私の敬愛する作家 開高健(コラム32:酒場放浪記の注1参照)がネコについて書いた見事な一文があります。

「媚(こび)と傲慢(ごうまん)の精妙きわまる結合。これほど人間の暮らしの芯(しん)にまでもぐりこみながら、これほど人間の支配を拒む、役立たずの怠け者、憎さも憎し、かわいさもかわいしという、絶妙な、平凡きわまる生き物はほかに類がない。」

これほど巧みにネコ賛辞をしている「開高先生」も、イヌに対しては実にツレナイのです。

「私もまた、猫好きの一人として、イヌの忠誠心をかねてよりバカにしているのである。目によどむ一抹(いちまつ)の蒙昧(もうまい)さが、どうも気にさわっていけないと思いこんでいる。」

(「舞台のない台詞」 生きとし生けるもの の項より)

「蒙昧」とはわかりにくい言葉ですが、「無知蒙昧」などと言う言葉があるように、人になつき忠実に仕えるイヌがアホに見える、という意味のようです。きれいな服を着せてもらって、毛を奇妙にカットされて、リボンなぞをつけて、TV 出演しているカワイイ犬達を見ると、私もやり過ぎではないかと思えます。「こんなことして、コイツらはしあわせなの?」「飼い主の自己満足じゃあないの?」と思えますね。ペットショップに行けば、これでもかとばかりにペットフードがズラリ、さらにペットのオモチャ、そしてTシャツやカートまで……「これってオカシインじゃないの?」と思えますな。

細君曰く「ウチのベリーにも似合う服ないかねえ」

「止めといた方がええ。コイツのことじゃけえ、大暴れして破いてしまうだけよ」

(納得の表情で)「やっぱり、そうじゃろうねえ」



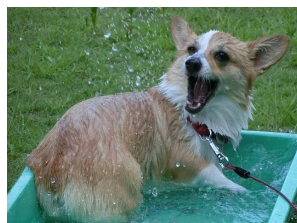
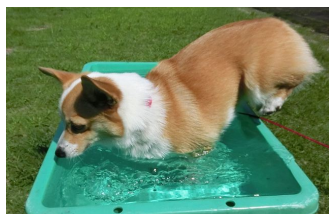
犬や猫を溺愛する人は、心の何処か病んでいるのではないかな。そんなことを言った人がいます。人間同士の愛情とか信頼とかいった心の結びつきが得られなかったり、人間関係に失望したりした人が、その代償としてペットを愛するようになるという意味でしょう。これは間違った意見ではないでしょうね。動物は人間のように意志的に裏切ったりしないからです。それはそれでイヌやネコしか心を癒してくれない、という辛い現実社会があるのだし、それで心の安らぎを得れるのなら別に問題ないじゃないか、と思えますよ。

しかし、イヌに服を着せてはいけません。イヌのレストランなどというのもイヤですね。ベリーちゃんの故郷の英国では、「イヌは人間に從属する生き物」というクールな考えが定着しているようで、どうもイヌと

の接し方が日本人とは違うようです。ベツタリとペットに寄り添うという可愛がり方は、日本人の特性なのかもしれませんね。当然のことですが、イヌはヒトではありません。人間の世界に忠実に従属して「いい子」になるイヌ達もありますが、ウチのベリーちゃんには、「哺乳類イヌ科」の本来の野性味を失わないでいてほしいですね。「オテンバ娘」のままで、いつまでも元気に走り廻ってほしいものです。

同じ哺乳動物、ヒトとイヌという「異種の生体間」の、心の「触れ合い」と「すれ違い」の交流を楽しみたいもんですね。ここで私も向こう見ずにも、「開高センセイ」に対抗(?)して、「イヌの賛歌」というより「ベリーちゃん賛歌」を、試みてみましょう。

野生の本能を捨てきれぬくせして ヒトに寄生する 不忠なる僕(しもべ)
ヒトを小ばかにしつつ 愛想笑いをする 狡猾(こうかつ)なる甘ったれ
獣の本性と類まれな身体能力を押し隠し 飽食の道を選んだ凶暴なる臆病者
二律背反(にりつはいはん) 矛盾に満ちた存在でありながら 過去の悲しい思い出を押し隠し
陽気に豁達(かつたつ)に自己主張する 心寂しきロンサムガール
それなのに それゆえに おまえなしでは生きてゆけない……



今年の夏は昨年と全く変わり、連日の猛暑。英国産犬種「ウェルシュ・コーギー・ペンブロープ」のベリーちゃんは、寒さにはモノスゴク強いですが、暑さはまるっきり苦手。最近の一番の楽しみは午後の水浴です。大好きな水の中で、幸せそうにくつろいでいる<彼女>に、今の心境を一言語ってもらいましょうか。

「ウチの気持ちがわかってもらえんことも、エツとあるんじゃけどねえ。
不満を言うたらキリがないんじゃけど、今は大事にしてもらうとるけえ、
幸せなうじゃと思うとるんよ」

